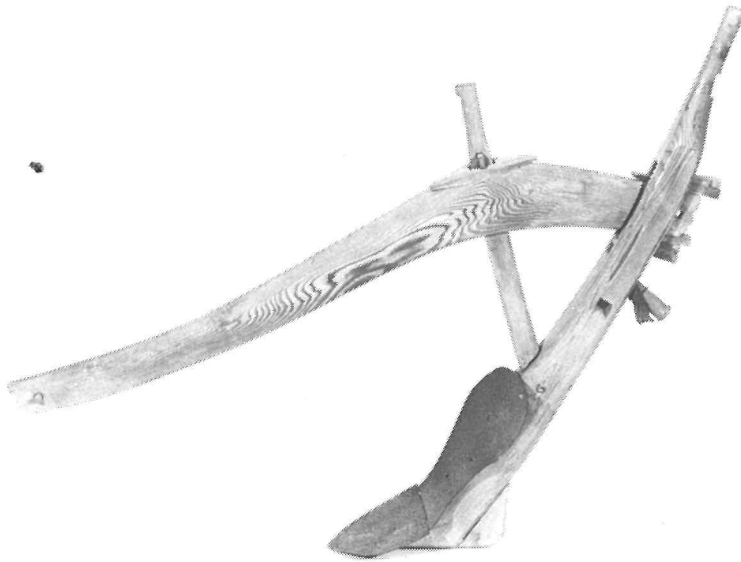


# 民俗博物館だより

Vol. XII No. 1

1985. 7. 10



▲カラスキ (館藏品)

## 目 次

十津川村旭の村の生活伝承.....	1
譲り—ハンチャを無形的 側面から見る—(物質文化14).....	3
夏祭り・祇園祭り (大和の民俗行事37) .....	5
山添村室津の婚姻習俗 (民俗調査抄報27) .....	6
民俗公園短信.....	7
おしらせ、他.....	7

ここでは、十津川村旭の迫のカイトが旭ダム建設のため水没するにあたり奈良県教育委員会の依頼を受けて昭和49年に民俗調査された八代学院大学の林宏教授の「旭ダム民俗調査」ノートの調査項目の一部を紹介していただきました。

本誌では、日常の暮らし（衣食住）に関するものに絞りましたが、村落や家の成り立ちに関する伝承や、信仰、年中行事などの伝承も含まれております。当館・大和民俗公園内に移築復元しています旧木村家の所在していた村の生活の一端を理解してもらえれば幸いです。（編集子）

\* \*

## 衣

### ●田植えの服装

タウエは女だけの仕事。男はスキ（鋤）役。昔はフンドシ（コシマキ）の上にツツッポ（筒袖）のナガギ（長着）を着て、カラアゲし、タスキは掛けず、一巾または一巾半のマエカケをしめ、裸足で植えた。テッコをはめ、ハバキ（上と下を紐で結ぶ）をはいた。

## 食

●もともと田が少ない上に、折角作っても昔は今の1/4くらいしか作柄が無く、米・塩はみな五条から買った。

### ●イモガユ、イモオカイ（蕎粥）

米粥にズコズコズコ切ったサツマを入れて煮いたもの。

### ●麦飯<sup>※</sup>

### ●一日の食事

アサメシ 6時頃 オカイサン

途中で一服しても何も出ぬ。

ヒルメシ 11時～11時半 麦飯（ムギメシ）

「～食べようか」とホメク（大声で呼ぶ）。

\*畑を沢山持っていた「久保」（森尾）家では、朝から麦飯を炊いた。仕事の手間を省くため大きな鍋（3升）で一日中食うだけ炊いておいた。五升鍋で炊いたこともある。ケンズイのムキに余分に炊いておく。

麦飯の方が余計食う。米より腹が減るのが早い。

ケンズイ 中谷ではオチャ。 3時。

ヒルメシの残り。

ユウメシ 6時を過ぎることが多い。

麦メシ ホイモ（里芋）

ヤショク アイ（普段、平日）に食べず。

ヨナベで忙しい時だけ

### ●ナンバキビ（玉蜀黍）の汁

穂を十分成熟させて干して貯蔵するほかに、まだ若い穂をとって塩茹でにして食べた。乾したものは碾割りにして炊いて食べた。ナンバモチは余りうまくない。

子供の頃は若い穂をとったあとの茎を折って捻じって汁を吸った。ほんとうに甘いものがある。小学校の頃、前川のオバーがとって呉れて、毎日待ち構えて渡してくれるのをかじりながら家へ帰ったので、道ばたが、キビの吸い粕で一杯になった。

### ●ヒエ（稗）

大変手が掛かるが、おいしくて栄養価が高い。

米を少し入れて御飯に炊く（ヒエメシ）。

ヒエダンゴにもした。稀にはお粥にもした。

### ●トウキビ

カラウスで粉にハタイで団子や餅に作る。

ハクにして（精白して）粒の俣、餅にもするが、搗き難い。

### ●ソバ

そのままアラ（粗）で置いておいて、ヒキウスで碾いた。

### ○ソバネリ（ソバカキ）

はじめにソバ粉に水を入れてちょっと混ぜ、それから熱湯を注いで、塩または醤油（好みによって砂糖も）を入れて食べた。

### ○ソバウチ・ソバキリ

うどんと同じように使ってよく食べた。

ソバウチパンの上でメンボウでウチ（ソバウチ）、大きくて平なソバキリボウチョウで切って食べた（ソバキリ）。製品はソバで昔はオオツゴモリ（大晦日）にツゴモリソバを食べた。

### ●餅のいろいろ

### ●米の餅

アワモチ 粟の餅  
 トウキビモチ 唐黍の餅  
 ヨモギモチ ヨモギを摘んだ時にも作るが、ヨモギをユガイで(茹でて)干しておいて、正月前にも作った。

●大根の保存加工

輪切りにして—これも厚く切る人、薄く切る人がある—干す。

また、まるごと干す人もある。この場合は煮く時に刻む。漬物にも。

センギリ ダイコンツキでついて乾した。

●ホイモ(里芋)

子芋はコジ、親芋(かしら)はカブ。

●ニボシ

塩だけで煮詰めたもの(ニドイモ(ジャガイモ)、クリの場合もこういう)。

以下「食」の項は紙面の関係上省略するが、デコマワシ、ワリナ、ズイキ、サツマ(薩摩薯)、イモガユ(イモオカイ)、ホシカ・ホシカイモ・ホシイモ、シラボシ(白乾し)、カシ(檜)、カシコ(檜粉)、シイ(椎)、トチ(栃)、クリ(栗)、カキ(柿)、ズクシ(熟柿)、ゼンマイ、ワラビ、ダライ、スダケ、エビカズラ、マタタビ、ツボキリ、ナレズシ(クサレズシ)、カツオブシ(鰹節)、ニボシ、食用油、漬物、豆腐・蒟蒻・味噌・醤油などの調査項目があることのみ挙げておく。

住

●間取り

梅ノ木、中谷、迫共に同様、各室の名称も同じ。

●各室の機能

○ダイドコ

3尺四方のユルリを中心として曾での煮炊き、平常の起居、団らんの間であり、「久保」森尾家の場合、奥寄りの天井裏に7本の丸太(ナゴ)が渡してあり、昔はこの上にコンニャクの種イモやサツマの種薯を上げておいた。茶タテ(袋)なども。

宇宮原・谷瀬方面で聞かれた「セイジ」の呼称は旭の3カイトのどこでも聞かれなかった。

○エン

古い家ではすべて1間巾。

昔は土族だったからカゴ(駕籠)で帰って来て、カゴの俣入れるように1間巾のエンを取った。エンのザシキ側の長押の上にコトウジが掛けてあり、これは奥へナオシとく(しまっておく)ものではないとジイ(祖父)が謂っていた。

※コトウジ—槍のように先が金(かね)になって、又をはったようになって、一杯ボロッコ(いぼいぼ、ぶつぶつ)がついていた。曲者の袖摺め用の武具。

侍付合いしていたので、カゴで来て、コエン(小縁)の前に着けてエンに上がり、ここで装束を直した。偉い人ならエンまでカゴを上げたらしい。後には、養蚕用の桑を刻んだり、雑穀を干したりする場になった。

○コエン(小縁)

エンの前面に取付けた1尺5寸巾くらいの雨縁。迫出身の岸尾姫はウチエンという。

○デー ナカノマともいう。

主人夫婦の寝室。

昔はここにも1尺5寸角のユルリがあった。

客がエンに着けば、主人はデーで待受けて、ここで到来物(土産)を受けて、着到の挨拶を受けた。だから、本来は「礼の間」で、それが「デイ」と訛ったのである(中砂老)。

古い家では大抵10畳になっている。

○キヤクデンまたはキヤクデ

オクノマともいう。正客用。

ここで正式の挨拶し、ここで接待するのは特別な客か、特別な折である。

○オク(仏間、ミタマヤ)

主人の居間。書院になっている。いざという時に備えて、大抵奥の間から外か、隣の部屋へ抜けられるようになっており、一番安全な部屋。

○ネマ 若夫婦の寝室

ここで紹介した十津川村旭の村落の生活、とくに衣、食、住に関する伝承については、生業、信仰、年中行事、外の調査項目の一部であるが、梅ノ本の中砂菊次老(明治23年生)、今日の「久保家」と称されている家の当主である森尾高春老(明治32年生)、高春老の夫人の森尾すえ(明治41年生)、そして菊次老の甥の中砂益治の各氏から聞き取りしたものである。(八代学院大学教授)



## 譲り —ハンチャを無形的側面からみる—

徳田陽子

現在、私は、仕事着を形態的に調査しているが、聞き取り調査をしているとき、「譲りでもらった」という言葉を耳にする。この場合の譲りとは、形見分けのことである。

そこで、今回は、最近、寄贈を受けた仕事着の中から、はっきりと譲りでもらい、嫁入りのときに持参したことを聞き取ることのできたハンチャ2枚を中心に、有形の物における無形的な側面に焦点を当ててみたいと思う。

この2枚のハンチャは、添上郡月ヶ瀬村で寄贈を受けたものである。

月ヶ瀬村は、奈良県の東北部県境で、大和高原の一部をなす地域である。名張川（現在、下流の高山ダムの完成により月ヶ瀬湖となった）に沿った丘陵地帯で、川東の石打・尾山・長引と、川西の桃香野・月瀬・嵩にわけることができる。石打は三重県上野市と隣接し、上野の市街まで約10kmの距離である。それに対し、桃香野は、奈良市邑地と近いが、奈良の町とは遠く離れた位置にある。だから、同村は上野の文化圏に入る地域であり、上野に一番近い石打が一番流行にも敏感であるという。

月ヶ瀬村は梅林で有名である。大正初期までは、烏梅の生産や養蚕が盛んであったが、次第に衰え、その代わりにお茶の栽培をする家が増加していった。それに加えて、冬は山で柴刈りや炭焼きをした。同村全体で約500世帯で、そのほとんどが農家で、稲作をオチミ・コマチ（谷間の棚田のこと）でしている。



▲ ハ ッ ピ (桃香野)

衣類は自家製が多く、この辺では、かつては、綿作りから始め、糸は尾山や宇陀郡室生村下笠間の紺屋で染めてもらい、自分の家で機織りをしたという。嫁入りのときにも、仕事着を持参するのが普通であった。

後で紹介するハンチャは綿入れのハンチャであるが、これに関連して、同村の女性の仕事着について少しふれておきたい。

女性は、田畑の仕事をするときには、上衣は単の筒袖の縞や緋模様の木綿地のハッピー、下衣は緋木綿のイマキ（腰巻）をつけ、半巾帯を巻いて細紐で結び、帯の下に三巾前掛や四巾前掛などをした。田植のときには、紺バッチをはき、その上にイマキを巻き上げて短くして身につけた。昭和16、7年頃からモンペをはくようになり、イマキ姿が徐々になくなっていった。

冬の山仕事の場合は、ネルの肌ジュバンに、上衣は縞ないし緋の袷のハンチャ、下衣はネルのイマキ、その上に半巾帯を巻いて細紐で結び、前掛をしめた。そして、縞木綿の綿入れのハンチャかソデナシを羽織った。



▲ 茶 摘 み 姿

月ヶ瀬村の場合、ハッピーは<sup>ひとえ</sup>単で、裾の両脇に10cm程のウマノリが付いて、体を動かしやすいように工夫している。身丈は、かつては、膝下までであったが、第二次世界大戦の中頃から、短くなり膝上ぐらいになった。これは下衣がイマキからモンペへと変わって、余り身丈を長くする必要がなくなったからであろう。ハンチャは、裕ないし綿入れである。綿入れのハンチャは、洗うときには、ほどいて、洗い張りして、仕立て直すので手間がかかるので、部分的に洗ったり、取り替えたりできるように、特に汚れたり、やぶれたりしやすい衿や袖口には、共布や別布を重ねている。

綿入れのハンチャは、仕事を始めるときにはぬぐことが多いが、仕事に行くときに着たので仕事着の範疇に入れた。同村では、裕・綿入れの区別をして呼ばなくてもわかる場合は、単にハンチャとのみ呼んでいるので、次に、譲りの綿入れのハンチャのことを紹介するに際しては、ハンチャとのみ記すことにする。

同村尾山で寄贈を受けたハンチャは、現在80余歳になる福岡シゲノさんの持ち物であった。旧姓東口シゲノさんが、18、9歳（大正中頃）で、福岡家へ嫁入りしたときに持参し



▲ハンチャ(尾山)



▲ハンチャ(桃香野)

た。井田家のおばあさんが織った布を、おばあさんが亡ったときの譲りでシゲノさんがもらって、自分でハンチャに仕立てたのだという。地味な縞柄であったから、年寄になってから着るつもりで、袖付けの下の脇を完全に縫い合わせた（若いときは八つ口をあげ、元禄袖にしたりした）のを作り、しつけ糸を付けたまま保存しておいたとのことである。東口家・井田家・福岡家共に尾山にある。戦前は、同大字内同志の結婚が多く、血縁関係の集まりである一統が重視されていたようであるが、東口家と井田家は同一統ではない。

もう1枚のハンチャは、大正時代に、奈良市邑地の谷奥イトエさんが、月ヶ瀬村桃香野の徳田家に嫁入りするときに持参したものである。そして、イトエさんを母として大正11年に生まれた千鶴子さんが、母親（昭和2年死亡）の譲りのハンチャをモンペに仕立て直すようにと言われて、昭和19年、尾上家に嫁入りするときに持って来たという。結婚式も夫になる相手が出征中で1人で上げたという時代である。まだ、モンペが出回って数年で余りモンペのなかった頃であり、戦時中で、将来に備えるよりも、今の不足を補うことの方が大切であった様子が窺える。結果的には、しつけ糸をつけたまま、今まで、残されたのであるが、第二次世界大戦による物不足の余波を被ったといえよう。

現在は、時代が変わり、必要なときに既製品を購入することが多いが、戦前までは、衣類を準備して、嫁入りのときに持参した。さらに、物持ちがよかったので、母から娘へと受け継がれることもあった。譲りは、効果的に活用されていたのである。

木綿地でハンチャを縫ってからだけで60年以上経っているわけで、その間を、作ったり、譲り受けたりした人々の目を通して見る場合、人とハンチャのかかわりから生じる無形の、精神的なものが加わる。現在、形式的にでも形見分けが残っている所以であろう。

そして、その無形の側面を客観的にみると、例えば桃香野のハンチャのように、その時代の世相の一端を示す資料ともなる。今回は、譲り→嫁入りに持参という、譲りの一例だけである。これからも調査をしていきたい。

## 夏祭り・祇園祭り

浦西 勉

大和の夏祭りと言えはといった何をさせば良いのであろうか。盆の行事をのぞくと、そして広域な地域に大きな祭礼がどうもみあたらない。秋祭りと言えは、あれかとすぐ理解できるが、夏祭りと言うと、どのような行事を言うのか不明確である。奈良市の弁天祭り、奈良市・田原本町・天理市櫛本の祇園祭り、橿原市八木の愛宕祭りなどが、この夏祭りの範疇に入るのであろう。今日、行われる花火大会などを含めて考えてみると、夏祭りはどうも町を中心にした祭礼が多いのではないかと思う。ここでは祇園祭りをとりあげて、夏祭りの性格を考えてみようと思う。

田原本町の祇園祭りは津島神社を中心に、今も盛大に7月17日から3日間行われている行事である。町内各戸に提灯を軒先に吊り、出店が所狭しと、道や神社境内にならび、また広場で万才などの催しが演じられている。境内などは人の群でいっぱいになるのである。また各所に「タテヤマ」と呼ばれる見せものが設けられ、人々はそれを見てたのしむ。とにかく、人が多く出、夜おそくまで町内はにぎわうのである。

田原本町の祇園祭りはかつて旧6月7日より14日の8日間行われていた。田原本藩の文政6年(1823)6月の日記に注①

祇園会に付御徒士目附町廻りいたす。とあり、人がにぎわいあらそいもおこるので今の警察の役目となる目附がみまわっている。さて、祇園祭りの行われる津島神社は、延享3年の記録では次のように記されている。注②



▲ 祇園祭りの様子

春日明神 天治二年と棟木に書附  
牛頭天王 御座候得共委細相知不  
八幡宮 申候

そして、中央の牛頭天王が重きをおかれていたようで、町民は祇園社とよびならわしてきた。祇園社と言うと京都八坂神社と同じで、御神体が牛頭天王なのである。また同神社の記録によれば「明暦三年(1657)丁酉霜月六日 牛頭天王 造営」とあり、注③すでにこの時から祇園祭りが行われていたと考えられる。

また、天理市櫛本の和爾下神社でも7月24日祇園祭りににぎわう。この神社も治道天王社と言われ、牛頭天王がまつられている。

その他、奈良市、桜井市初瀬などで祇園祭りが行われているが、この時まつられているのは牛頭天王なのである。

牛頭天王は、本来インドでは疫病退散に利益のある神で、日本に伝わり疫病、農作物の害虫、その他邪気を払い流し去る疫神として信仰の対象になったと言う。注④このような神であるから、丁度、日本の何もかもがくさりやすく疫病の流行しやすい時に祈る神として受け入れられたのであろう。

また、この祇園祭りは町で行われることが多いのであって、このことは、この祭りの特色でもある。農村では田植が終わり、やっとひといきつける頃、個人の開放感を味わう場所として、この時期の町の祭りを位置づけることができる。

注①～③ 『田原本郷土史』

注④ 『国史大辞典』



▲牛頭天王像『仏像図彙』

# 山添村室津の婚姻習俗

横山 浩子

室津は、奈良市から東へ、水間街道（国道369号線）を通り山添村に入ると、その最初の集落である。このあたりはかつて東山中とも呼ばれた地域で、室津も谷間傾斜面に位置する農村である。

## ①交際・通婚圏

かつては、見合いなどよりむしろイセキなどをきっかけに、結婚に至ることが多かった。イセキとは、旧暦7月～9月にかけて、近郊の村々で行われた盆踊りのことで、青年達は、この時期、各村を回って歩いたものである。

この他二十三夜待のような折に娘のある家をヤドとして、男女が夜の更けるまで談笑する、というようなことが行われ、室津から都祁村下深川あたりまで出かけていった。

通婚圏はある程度限られた範囲ではあったが、村外婚がけっこうあって、村内婚とは限らなかった。ただ婚姻しない村というのがあり、また隣り村とは縁組みしない、ともいった。縁組みすれば氏神の祟りがあるとか、両村に通じる道の境に嫁取り神がおられる、とという言い伝えも近郷各所にあった。室津では桐山・北野山とは縁組みしないといった。

村外から嫁取りをする場合、嫁方の村の若

衆に婿金を支払わなければならなかった。

## ②足入れ

足入れが行われるのは、年が若すぎる、年回りが悪い、荷ごしらえができない、家の事情で暫く娘を手離せない、などの場合という（東山村史）。

室津では「年越し嫁」といって、一旦嫁入りをするものの、二、三日すれば実家に戻り、その後暫く婿が嫁方に通う。その後、年を越して、農閑期に正式に婿方の家に引き移る、ということがときどき行われた。

## ③荷送り

荷は嫁入りのとき、或いは数日前に運び込むこともある。嫁入りの翌日、近所に披露することになっている。

## ④嫁入り、嫁いじめ、入家の儀礼

嫁入は仲人に伴われて出掛けていく。

また村の入口に穴を掘っておくなど、嫁いじめが行われた。このような行為は「よくやった」とほめられた、という。

嫁家に入ると入口にたらいを置いて足洗いを行うか、または仲人（女性）に伴われて、嫁が鍋つかみを持ってクドサンのまわりを三回まわる。などの儀礼を行う家があった。

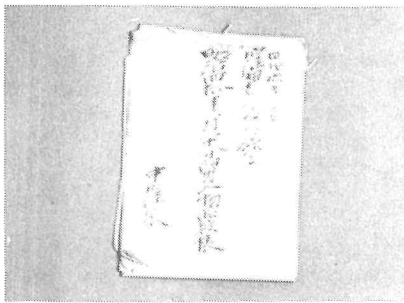
家に上がると真っ先に仏壇に参る。このとき仲人が縁を開け放つことになっていた。

## ⑤舅入り

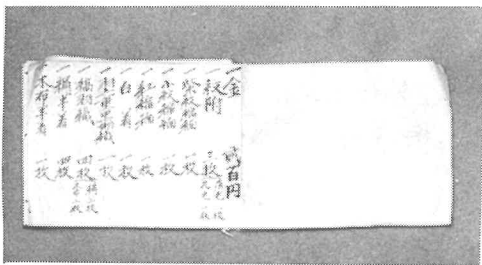
舅入りという言葉は、双方の親の、親戚としての初の行き来（親戚成り）、または、初婿入りと同義に使われている場合が多いようである。県内でも幾つか事例が報告されているが、親戚成り的な儀礼として行われている（例えば奈良市大安寺、曾爾村など）。

さて、室津の場合であるが、それは嫁の実家で家督を譲るとき、財産分けとして荷を送ることを指している。中窪家には明治末の「舅入物品控帳」が残されており、反物、衣類、夜具、單笥、長持から火熨斗のようなものまで見える。なお、これ以後実家が嫁に出た娘に対して物品を贈ることはないという。

（S.60.3.21 中窪寿雄氏、84才より聴取）



▲「舅入物品控帳」(山添村室津)



▲ 同 上



## ◆◆ 民俗公園短信 ◆◆

大和民俗公園は、すでに皆さま方に利用していただいておりますが、この四月一日から正式に都市公園として開園しました。完成までは、あと数年かかりますが、もうしばらくお待ちください。

春から初夏にかけては当公園の花の一番美しい時期です。ウメから始まり、サクラ、ユキヤナギ、ヤマブキ、キリシマツツジ、ヒラドツツジ、サツキと切れ目なく続きます。これからは雨の季節になりますが、アジサイやクチナシが目を楽しませてくれます。暑い夏は花にはきびしい季節ですが、昆虫達にとっては天国なのです。カブトムシやクワガタと仲良くなってください。

工事の報告になりますが、59年度は東地区を中心に園路などを整備しました。また西入口の付近にはツツジ類やケヤキなどのたくさんのお樹木を植栽しました。この場所はこれまで少し殺風景だったのですが、来春からは歩くのも楽しくなることでしょう。(嶋田 記)



▲園内・児童広場で遊ぶ子供や家族連れ



▲園内を散策する家族連れ

### ★★★★★ お し ら せ ★★★★★

#### ●民俗博物館の行事予定

☆S60年 4月10日～9月16日

テーマ展「女性とくらし」

☆S60年 6月22日～8月25日 AM10～PM4

体験学習講座〈はたおり教室〉

※講師指導日：6/22～6/23、6/29～6/30、  
7/7、8/25

#### ★予 告★

■S60年9月1日(予定)から、PM2～PM4

民俗カルチャー講座(民俗コース)

※同講座は、テーマ展「女性とくらし」をコース  
テーマにして3回連続(毎週日曜日)の講座で  
すが、詳しくは当館へお問い合わせ下さい。

■S60年10月3日～11月24日

特別テーマ展

「水 と 生 活」

#### 《表紙説明》

奈良県では、むかしは6月中頃に春麦を収穫した後、田起こしを行なう。

この田起こしのときに、牛にカラスキ(犁)を曳かせて、田の土を数回回転させる。

このカラスキは、農家にとって大切な農作業の道具の一つであったが、今日では耕耘機がこれに代わって田起こしを行なう機械になっている。江戸時代に現われたカラスキは、昭和30年前後を境として姿を消していった、といわれている。

#### ■編集後記■

暖かいというよりも暑いという感じが続いた連休。この期間、民俗公園を訪れた親子連れの姿が目立った。父親と母親と女兒と嬰兒、母親と女兒二人、そして父親と男児二人……。

また、館内にも親子連れ、孫連れの老人の姿があった。館内の展示に見入る人々が、それぞれの関心事のあるコーナーに立ちつくし、「若い頃、祝いごとのあった家にモチを入れて持っていた……」とか、「あれがむかしのアイロンで、炭火を入れる……」という会話が展示場にこぼれる。温かい言葉の端々に哀惜が漂う。(佐)